

賀茂祭に就いて (關西旅行研究報告の一節)

一、總 說

賀茂祭りは、私達の關西旅行中での大きな期待の一つであつた。伊勢、奈良を経て、五月十五日の午前はじめて京都についた私達は、まださめきらぬ宇治の夢をそのまゝ、まづ、第一に賀茂神社に詣でた。そして、その盛奠の始終を拜觀し、更に、賀茂の河原に下りて、葵橋の上を通過せられる祭の行列を、心ゆくまで見物する事が出来た。

賀茂祭りは、いまは毎年五月十五日にきまつて居るけれど、昔は四月の中の酉の日に行はれた、そして之れを御阿禮と云ふ。紀貫之が

人もみなかつらかさして千早ふる

神のみあれにあふひなりけり

と詠んだのはこれである。又、これを葵祭りと云ふのは、祭日に葵の葉をかざしに用ゐ、又、社前を飾り翠簾などにかけるからである。公事根源に「昔、夢の告侍りしより、けふ、人々あふひ桂の鬘をかくるなり賀茂松尾の社司前の日より、しかるべき所々に奉る」とある様に、宮中をはじめその他顯貴の家には前日之を奉つたものである。又、京都の南にある男山神社の祭りを、南祭りと云ふに對して、これは北祭りとも云ふ。なほ、京都で中世以來、單にまつりと云ふのもまたこの賀茂祭りのことである。

これ等のことは既に記載の書が多いのでこれだけで餘は省略する。

二、沿革

賀茂祭りは、第二十一代欽明天皇の御代(二二〇〇—二二三二)にはじまる。大日本神祇史に「天皇の御代天下舉國風吹き雨零りしかば、卜部伊吉若日子に勅して卜はしめたまひしに、賀茂神の祟りなりと奏せり、仍りて四月吉日を撰びて、馬には鈴をかけ、人は猪の影を蒙りて、駈馳し以て祭禮をなし、能く禱りて祀らしめ給ひしかば、五穀成熟して天下豊なりき、賀茂祭り蓋此に始まりとあるに依る。

爾來賀茂祭りは、次第に發達したもののらしく、文武天皇の二年(二三三八)三月、祭日に衆を集めて騎射を行ふ事を禁せられ、同じく、大寶二年(二三八二)にも、重ねて之を禁じ給ひ、たゞ、當國の人のみにゆるされたと云ふ事實によつて見ても、當時この祭りが非常に盛んであつて、山城以外の國々から、澤山の人々が集まつて來たもの、様に思はれる。後、元明天皇の和銅四年(二三七二)四月「祭日自今以後國司毎年親臨檢察焉」と勅せられてから、山城の國司臨檢の事が始まり後年絶える事なく、又、嵯峨天皇の弘仁十年(一四七九)三月勅して賀茂祭りを中祀に准せられてから、歷代朝廷の尊崇あつく、禁闕觸穢の年の外毎年止めたまふ御事なく、勅使、官幣御發遣の儀式の如き、實に天下の壯觀であつたと云ふ。

賀茂神社は、平安奠都以來京都産土の神たる故を以て、厚く崇敬せられ、鎌倉時代に至つても、敢て異る事はなかつたけれど、武家專制の時代になつて、漸く衰へ、從つて、祭の所用の如きも、辛じて、その時々一時の急をしのぐ様な有様であつたが、室町時代にはその困難が益々甚しく、遂に應仁の亂によつて中絶せられて以來、容易に復興の事もはかられず、二百二十餘年の長い間、全く廢絶の姿で經過した。

東山天皇の御代に至つて、賀茂の神宮梨本左京亮祐之及び北村季吟等の斡旋によつて、再興の議はしめて

起り、時の將軍綱吉の上奏によつて、こゝに、ふたゝび祭儀は舊に復する事と定まり、元祿七年(二三五三)四月中の酉の日に、改めて舊儀によつて執行された。明治天皇の明治六年(二五三三)伊勢神宮以外の祭祀はすべて地方官に委任せらるゝ事に定められたが、賀茂祭りは古來最も有名なものであつて、これを廢絶せられるのは、惜しむべき事であると云ふので、明治十七年、男山、春日の二祭と共に改めて舊に復せられ以て今日に至つた。

三、祭儀次第

大鳥井を入つて右に折れると、みどり深い神木の梢高く茂れる下に、青草を縫うて一筋の細道がある、この小道をたどつて、神社の東北隅にある、小さき通用門を入つて祭場に列した。祭場は樓門の内神殿の前で心ちよく清められて居る。我々の位置の右手には清かに澄んだ清水があり、その池から流れ出つるさゝやかな流れで、祭場との間を限られた御大廣前の一隅が私達一般拜觀者の席である。設の席について、靜かに前方を見渡すと、明るい眞晝の太陽が、潔くしつらへられた祭場をてらして、ちり一つ見えぬ神前の御庭に白砂が清く輝やいて見るからに、おのづと人の心が改まる、定刻前の祭場は、たゞ潔らに靜かである。設の席から右斜に見上げる、玉垣の内にはかすかに神殿の御屋根が仰かれる、その正面中門の前には、二つの案が設けられ、その兩側に葵をたて、前方に盛砂がある。中門の前方、大廣前の中程に建てられてある破風造の舞殿、ものふりたる勾欄も何となく奥床しく、御簾なども清らかに巻き上げられて、そゝろに遠い古がしのばれるその北のきざしから中門までの間御筵がしき渡してある、祭場の周圍にめぐらした回廊の中央、舞殿の正面に樓門がある、その左方前面に御簾をたれて、とくに美しくしつらへられてある回廊の一部は、御勅使の

居らるる所であると云ふ。時折この豫感にみちた静けさの中を、狩衣姿の雜人が用ありげに黙々として行き交う。やがて御勅使參進の定刻まぢかになると、正面の樓門からは、裝束美はしい神官がとぎれ／＼に現はれて、各自設けの席について祭場一帯に一層嚴肅の氣がたゞよひそめた。まもなく御勅使は參着せられていよく賀茂祭典の盛儀は始められる。その次第は次の通りであつた。

當日午前拾時勅使社頭に參進す

舞人陪從相從ふ樓門を入る時陪從一二歌を唱ふ。勅使前を過ぐる時檢非違使代以下床を起ち敬禮、勅使樓門内簷下西に於て劔を解く。(各西面几床に居す山城南、内藏北)

是より先山城使代、内藏使代以下樓門を入り進、舞殿の東庭に候す。(先づ西の案次東の案に置く)

内藏使代樓門を入る時檢非違使代以下床を起ち敬禮。

次内藏使代史生をして御幣物を中門前の假案の上に置かしむ。(衛士代之に從ふ)

是より先御幣櫃を舞殿の東北庭に昇立。

次勅使舞殿の南階の下に立ち内藏使代に目す。

次内藏使代南階の下に參進御祭文を勅使に附し床に復す。

次勅使南階を昇り舞殿の座に着く。

次内藏使代史生を率て中門前假案に就き御幣物を執り中門に入り御幣物を神前の案上に置き退きて床に復す。

次勅使二拜御祭文を讀畢つて又二拜。

此間諸員床を起つ。

次宮司舞殿の北階を昇り神宣を傳ふ。勅使之を奉る宮司退去。

次宮司返祝詞を申、手を拍つ。勅使之に應ず宮司神祿を取り舞殿の北庭の案上に置き聊東方に寄り斜に勅使に向ひ之を申す。

次宮司案上の神祿を取り、舞殿の北階を昇り勅使の座前に來り授く。勅使之を受けて挿頭す。宮司退去
次勅使座を起ち南階を降り御祭文を内藏使代に返授く。畢て樓門の西廊に入り劔を帶す。内藏使代勅使の起座を見て階下に來り之を受く。

次神職御祭文の座を撤す。

次勅使西廊を出て舞殿の東南庭に立つ。

舞人舞殿の南庭に東上北面に列立す。陪從勅使の南に進み寄る(聊南に退く)

次陪從一二歌を唱ふ。

次御馬を牽廻す。(三匹)

馬寮使代前行す。

次陪從駿河歌を唱ふ。

次舞人舞殿に昇り駿河舞を奉仕し畢て殿を降り跪き右を袒ぬき更に昇りて求子を奉仕す。畢て殿を降り跪き紐を指し退出。

次陪從退出。

次勅使退出。

舞殿神服殿の間を経て西鳥居を出て乗馬休幕に向ふ。

次走馬。

勅使以下例に依て不観。

次勅使奏任官玉串を獻り拜禮。

次判任官拜禮。

次宮司玉串を獻り拜禮。

次禰宜以下拜禮（以上）

四、行 列

祭典の儀式の畢つたのは、正午過であつた。私達は直ぐに、社前を退出して、賀茂河原の廣い芝地に下りて、この、下賀茂の御社から、賀茂川堤を過ぎて、上賀茂の御社に行かれる、祭の行列を見物した。晝すこし過ぎた初夏の太陽を受けて、鴨堤の緑が、靜かに青くけぶる中を、徐ろに練りゆく長い行列は、さながら昔を今の色美しい繪巻物が、次から次と限りなくくりひろげられてゆく様に感じられた。その行列の始終は次の様であつた。

素袍 看督長代 同 舍人 檢非違使志代(騎馬) 調度掛 火長代 如木 同 白丁 舍人 檢非違使尉代
素袍 看督長代 同 舍人 檢非違使志代(騎馬) 童 鉾持 火長代 如木 同 白丁

調度掛 鉾持 火長代 如木 同 白丁 馬副 馬副手振同 童 雜色 取物舍人 白丁
童 火長代 如木 同 白丁 馬副 舍人山城使代(騎馬) 馬副手振同 童 雜色 同 白丁

白丁 (退紅)衛士代 白丁 御幣櫃 白丁三人 白丁 白丁 内藏寮史生代(騎馬) 雜色 白丁 雜色
白丁 (退紅)衛士代 白丁 口取 雜色 白丁 史口取 雜色

白丁 馬部 馬部 馬部 馬部 白丁 舍人 馬寮使代(騎馬) 童 調度掛 雜色 白丁 御車役人
白丁 馬部 走馬 白丁 馬部 走馬 白丁 舍人 馬寮使代(騎馬) 童 雜色 白丁 御車役人

牛童 車方(白丁三人) 大工職 掛竿(白丁) 御車役人 手明白丁
牛童 車(牛口付二人白丁) 雨皮(白丁三人) 棧持 二人 榻持 二人 口付 替牛 御車役人 手明白丁
牛童 車方(白丁三人) 大工職 掛竿(白丁) 棧持 二人 榻持 二人 口付 替牛 御車役人 手明白丁

和琴 退紅 舍人 雜色 白丁 同 舍人 雜色 白丁 同 舍人 雜色 白丁 同 舍人 雜色 白丁 同
和琴 二人 舍人 雜色 白丁 同 舍人 雜色 白丁 同 舍人 雜色 白丁 同 舍人 雜色 白丁 同

舍人 雜色 白丁 同 舍人 雜色 白丁 同 走雜色 櫓代(馬の口をさるもの) 使(騎馬) 舍人 馬副 同 同 隨身 同
舍人 雜色 白丁 同 舍人 雜色 白丁 同 走雜色 櫓代 同 使(騎馬) 舍人 馬副 同 同 隨身 同

手振	同	轆代 <small>舎人</small>	牽馬	居飼	小舍人童	雜色	同	取物 <small>舎人</small>	白丁	同	雜色 <small>(青)</small>	白丁	同
手振	同	轆代			小舍人童	雜色	同	取物 <small>舎人</small>	白丁	同	雜色 <small>(陪從(騎馬))</small>	白丁	同

[illegible]

雜色白丁	雜色白丁	舍人陪從 <small>(騎馬)</small>	雜色白丁	雜色白丁	舍人陪從 <small>(騎馬)</small>
雜色	雜色	舍人	雜色	雜色	舍人
白丁	白丁	內藏使代	白丁	白丁	內藏使代
同	同	隨身	同	同	隨身
馬副	馬副	手振	童	童	手振
同	同	同	雜色	雜色	同
雜色	雜色	取物舍人	取物舍人	取物舍人	取物舍人
白丁	白丁	白丁	白丁	白丁	白丁
同	同	同	同	同	同

心の中でこの行列を中心として物見車の立ち列んだ京都の昔を浮めて見る。文學や繪畫に描かれたるこの行列と比較して描寫の仕方を味つて見る。行列の中の人が、どうしても我々と同じ世の人と思はれない。遠い昔の別のサークルの人であるやうに思はれてならぬ。

五、諸役服裝

語釋でも繪畫でも實物標本でもよく分らぬ服飾の生ける意味を考へ味ふことの出來たのも、この祭典に列した一の賜物であつた。

勅使 四位 近衛中將

冠。垂纓、黑羅、菱ノ重紋。
單。赤、菱綾。
下襲。穀織物、二藍。
表袴。平絹、表白、裏紅、
袍。闕腋、穀織、黑色、輪裂紋。
帷。紅晒。
半臂。同。
大口。紅精好。

礪 六位 近衛將曹
冠。卷。老。懸。
袴。白。襪。赤。
單。赤。花。田。

舞人
五位
樂人

冠。卷纓。老懸。
大帷。胴紅。
大口。赤。
袍。闕腋。無紋。緋ノ紗。
表袴。白王絹。模様桐竹ニ鳥。
裾。花田。

陪從五位樂人

冠。卷纓。老懸。
大帷。
裾。平絹青色。
袍。闕腋、無紋紗、濃色。
差貫。紫裾濃。
袴。平絹。

山城使 五位 山城介

冠。垂纓、無紋。
大帷。
表袴。平絹、表白、裏紅。
袍。縫腋、穀織、蘇芳染、紋輪梨。
裾。穀織、二藍。
大口。

內藏使
五位
內藏助

山城使に同じ

(82)

衛士 無位官人

冠。細纓、老懸。
袴。白。布。
帶。白。

紺布。布。
單。白。

内藏寮史生 七位 内藏屬

冠。垂纓。
袍。縫腋、穀織、色淺綠。
大帷。平絹、表白、裏紅。
表袴。平絹、表白、裏紅。
大口。穀織、色二藍。

檢非違使 五位 左衛門尉

冠。卷纓。
下襲。色青、朽葉。
單。紅菱綾。
表袴。平絹、表白、裏紅。
大口。赤。
袍。闕腋、朱色、穀織物、輪梨紋。
裾。下襲に同じ。

同 六位 右衛門志

冠。卷纓、老懸。
大帷。赤。
大口。赤。
裾。青。
袍。闕腋、深綠。
半臂。色青。
表袴。平絹、表白、裏赤。

看 督 長

冠。細纓、老懸。
袴。白。
帶。白。
單。退紅。
白。

火 長

冠。上に同じ。
袴。白。
帶。白。
單。白。
袴。白。
單。白。

馬寮使 六位 左馬允

冠。卷纓、老懸。
大帷。
大口。
半臂。二藍。
袍。闕腋、深綠。
表袴。
裾。穀織、二藍。

主水司 六位 主水祐

内藏史生に同じ、但、袍深綠。

よく文章を読んでもこれ等の名詞は單に名詞としてのみ取扱つたのであつたが、今後この色や形やが鮮に目に浮んで文章にどれくらゐ色彩と活趣を見出し得るかも知れない。よくこの印象を強く明るく有して居れば、これ等の名詞を釋明するにも何か生々したものが出て來るにちがひない。私どもの所有の言語でこの印象を發表し得るにちがひない。これ等の理解や鑑賞の發表のためにはどうして新しい工夫をせねばならぬと思ふ。

大正四年十一月三日